



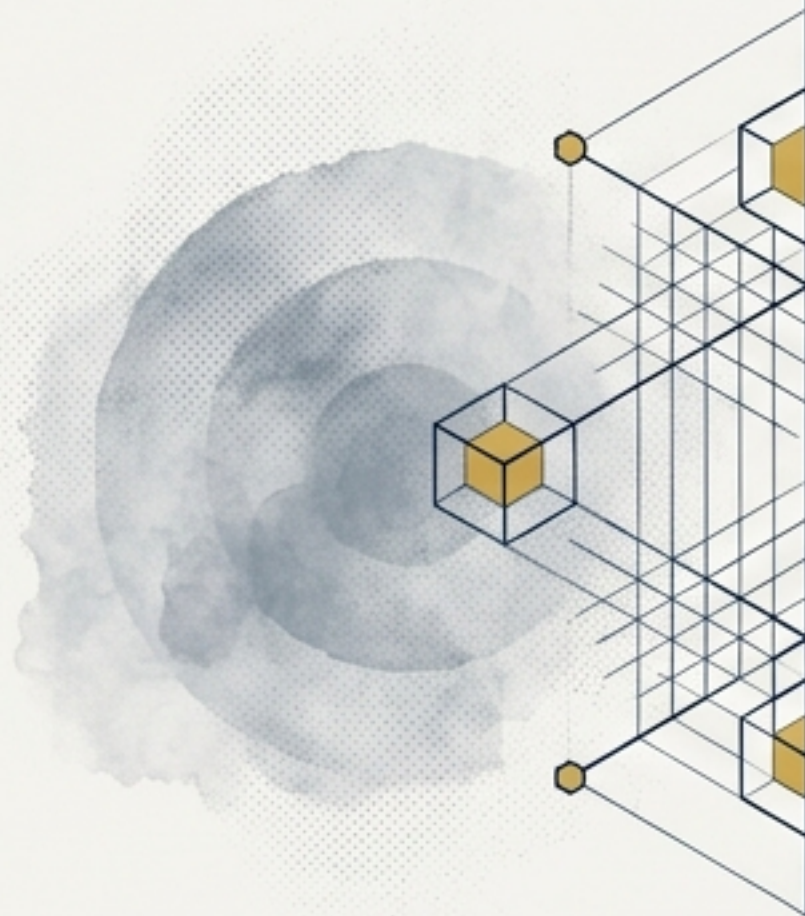
熱狂から実証へ：知財AIの 現在地とパラダイムシフト

2026年「知財・情報フェア」が示唆する、
特許調査ツールの次なる競争軸

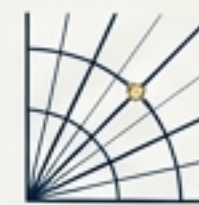
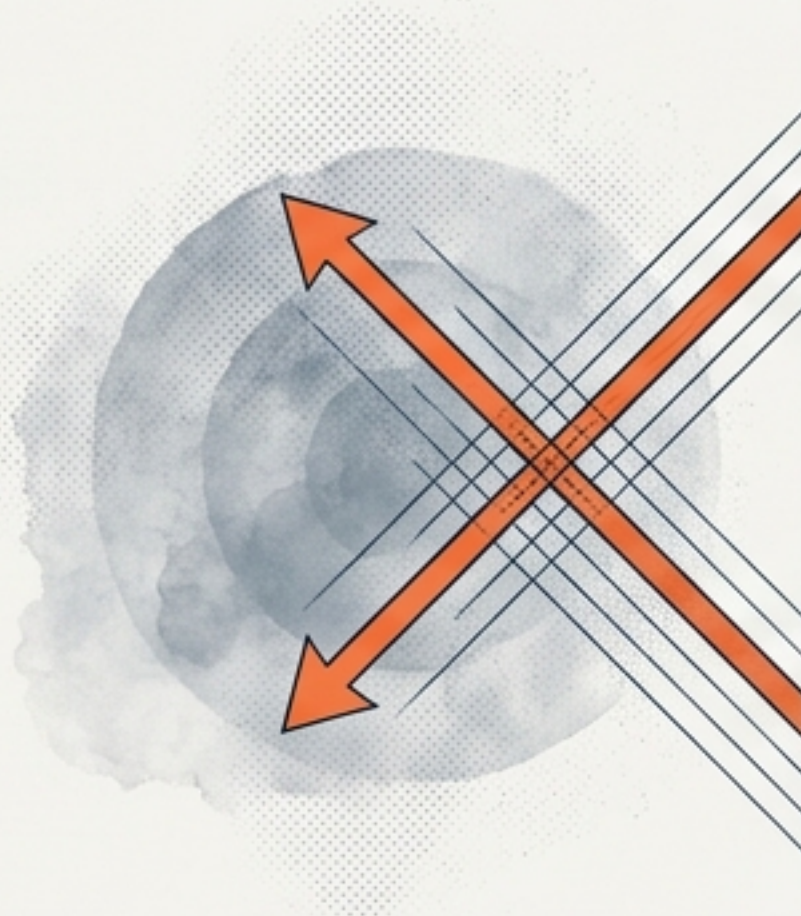
Executive Summary



【進化】「効率化」から「検証可能性」へ
特許特化LLMとAIエージェントの台頭。根拠の提示と再現率 (Recall) の追求が至上命題に。



【摩擦】競争軸の商業的シフト
ツールベンダー間の訴訟の争点が「特許機能の模倣」から「広告表示の妥当性・品質保証」へ移行。



【拡大】グローバル発信への布石
英語名称化と東ホールへの移設。来場者は1.5万人を突破し、実装期に向けた規模拡大が明確化。



Macro Overview: 2025 vs 2026

来場者数 (Visitors)

15,207名 → 15,502名

雨天・曇天の会期ながら堅調な増加。

規模 (Scale)

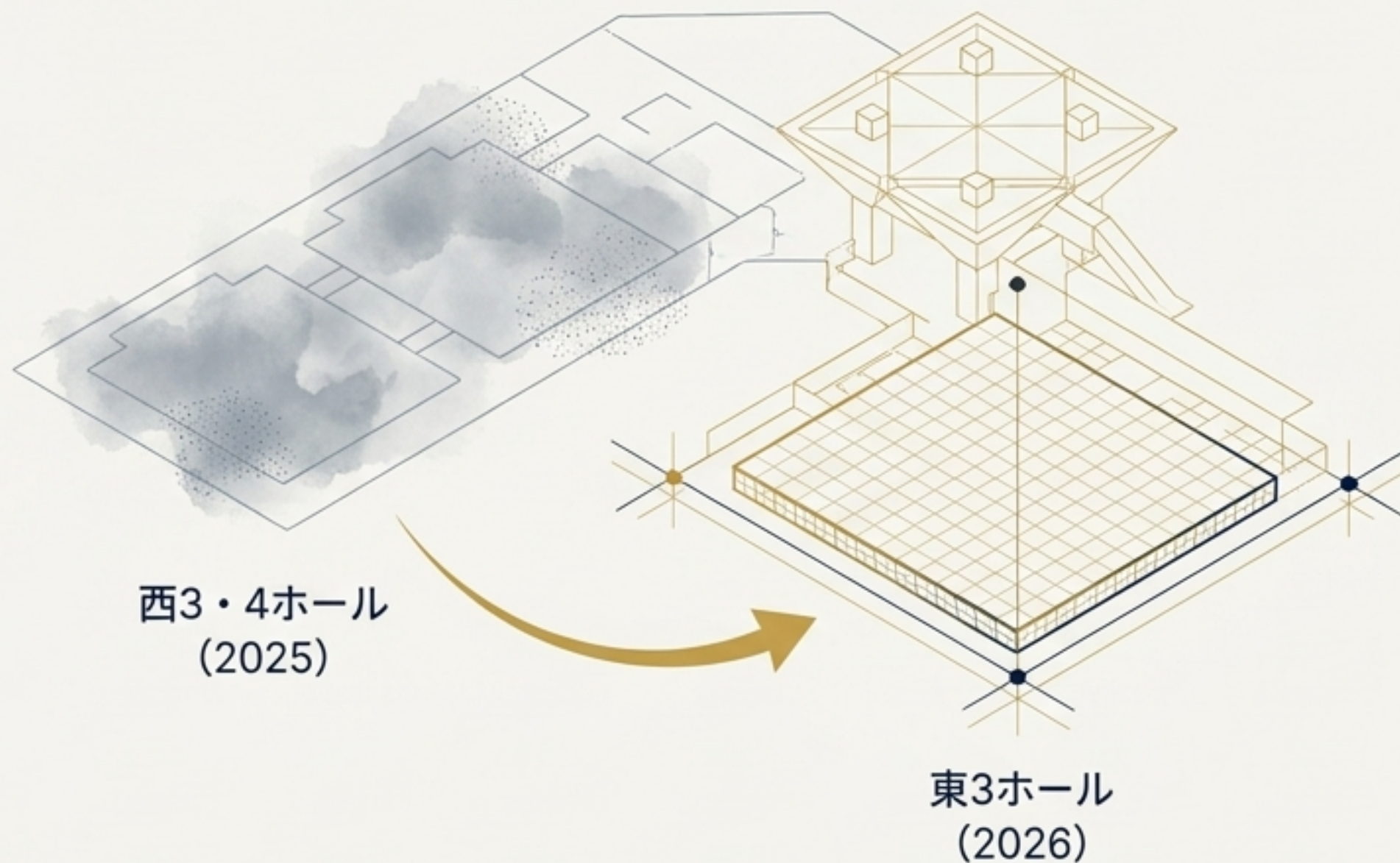
出展規模 158社 → 171社 (予想値)

東ホールへの移設に伴う会場規模の拡大。

名称刷新 (Rebranding)

**Intellectual Property Information
Fair & Conference**

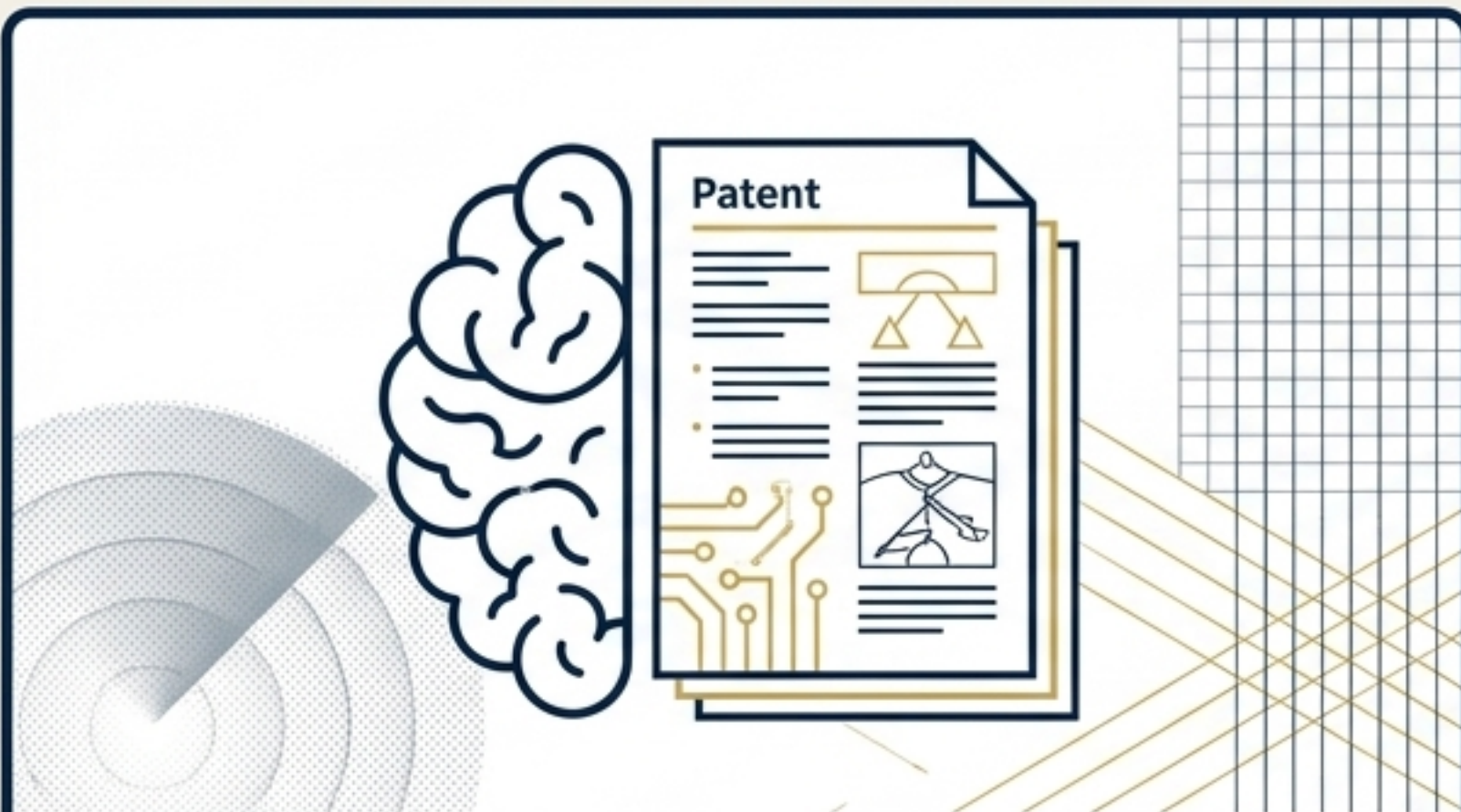
英語名称の採用による国内外への発信強化。



The Paradigm Shift Matrix: 知財AIの進化

	2025（熱狂と探索）	2026（実証と実装）
AIの位置づけ	生成AI機能の「搭載」。 効率化と自動化の訴求。	「AIエージェント」と「特許特化 LLM」の実装。検証可能性の担保。
ユーザー姿勢	「可能性の探索」と「ハル ルシネーションへの懸念」。	「ワークフローへの組み込み」と 「監査（Audit）の実施」。
解決策の アプローチ	処理速度の向上、要約の自 動化。	推論プロセスの可視化、再現率 （Recall）の定量的証明。

Trend 1: エージェントと特化型LLMの台頭



特許特化型LLMの深化

Player: Patentfield

- 審査官の思考プロセスを再現する特許特化型独自LLM「Dシリーズ」を初公開。
- 同義語拡張から図面読解まで、汎用AIの限界を突破。
- GENIAC-PRIZE 特別賞「技術新規賞」受賞の成果を継承。

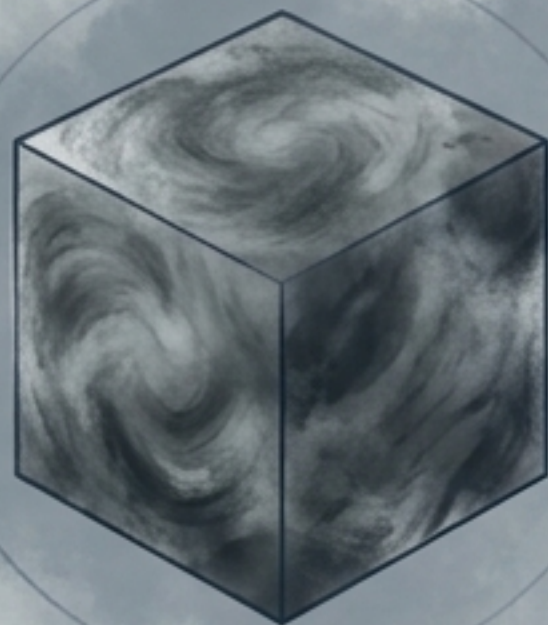


自律型AIエージェントの台頭

Player: パテント・インテグレーション (サマリア)

- 拒絶対応支援ワークフローにおける自律的エージェント化。
- 電気・機械・化学医薬の3分野で「再現率100%（上位30件）」を過去問検証にて達成。

Trend 2: 「検証可能性」への渴望



出力の「正しさ」を競う時代から、
「どこを人間が検証すべきか」を
示すプロセス可視化の時代へ。



【課題】ブラックボックス化したAI出力
に対する実務家の不信感と検証コストの増大。

CAS（化学情報協会）：「検証可能なAI知財調査（CAS
Newton）」。高品質データに基づくプロセスの可視化。

アイ・ピー・ファイン：「AIワーカー」によるノイズ90%
除去と、分析プロセスの透明化。

The New Human-AI Workflow



「AIによる専門家の代替（置換）」ではなく、「高度な協業（支援）」を前提としたワークフローの確立。

Market Friction: 移行する競争軸

技術的競争 (Tech Competition)

- ・争点: 「特許権侵害」の争い
- ・事例: PI社 vs Patentfield (2026年4月 調停終結)
- ・意味: ツール機能そのものの知財保護を巡る黎明期の摩擦。

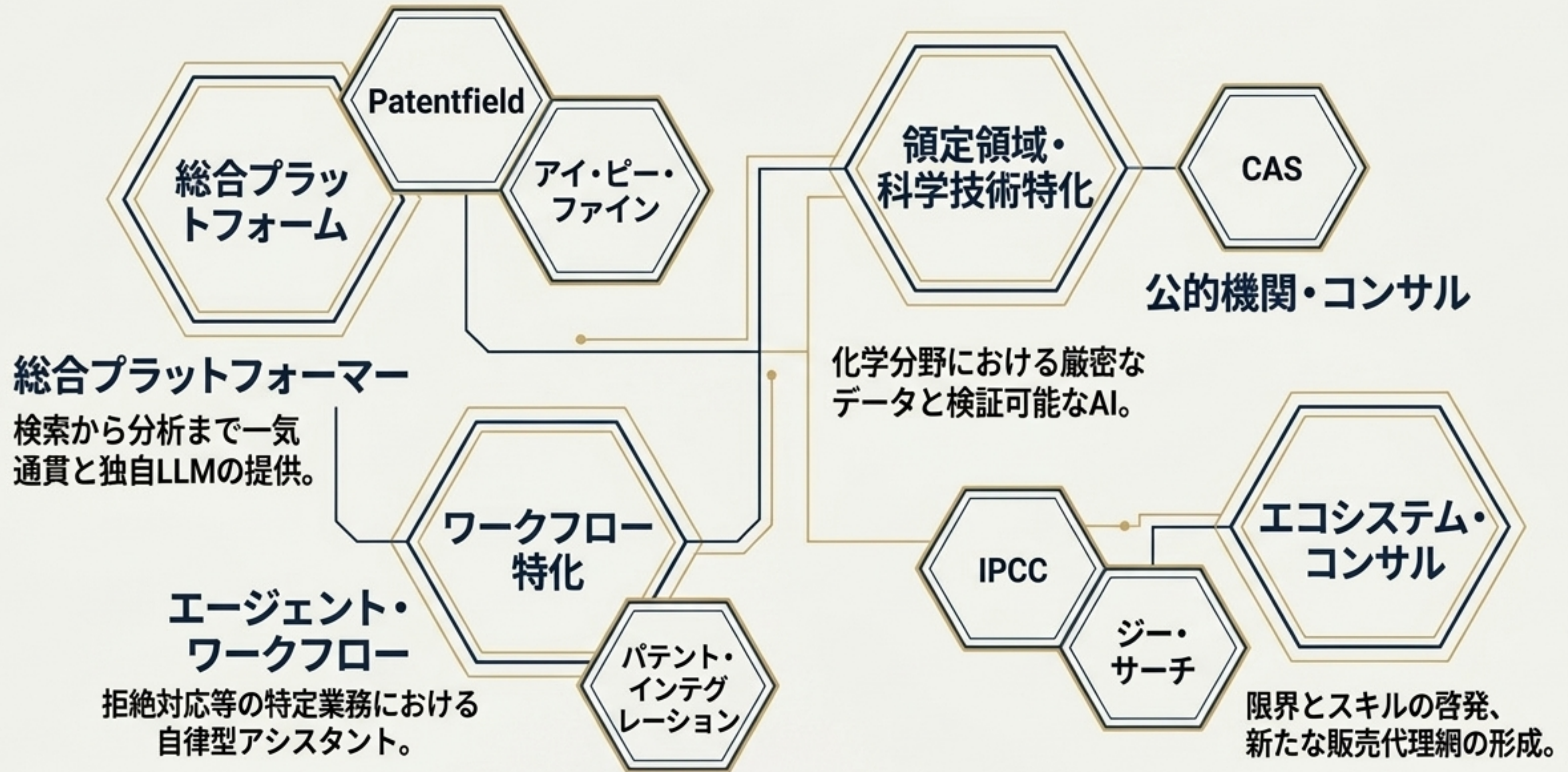


商業的競争 (Commercial Competition)

- ・争点: 「広告表示・性能の妥当性」の争い
- ・事例: PI社によるエムニ社への提訴 (2026年9月 不正競争防止法)。「99.9%コスト削減」等の表示への異議。
- ・意味: 検証データセットや対象工程を無視した過剰な性能アピールする、業界内の自浄作用と価値防衛。



2026 Player Landscape



※2026年の公式一覧が未公開のため、一次/二次発表で出展が確認できた範囲でのマッピング。

統合インサイト：知財AIツールの「新・選定基準」

01



Auditability（監査可能性）

ブラックボックス化していないか？AIの推論プロセスや「根拠（ハイライト等）」が実務家に提示される仕様か。

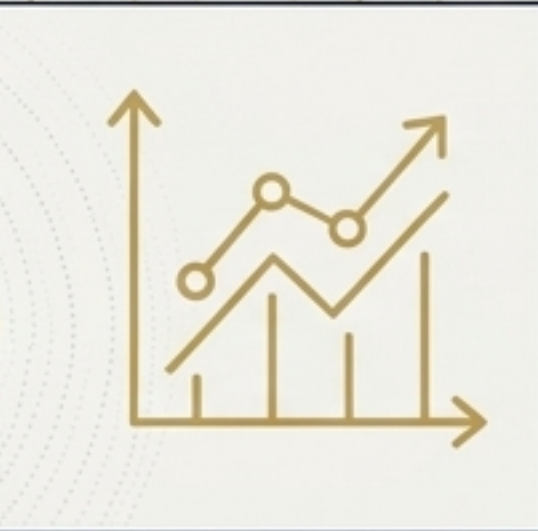
02



Domain-Specificity（専門特化性）

単なる汎用LLMのAPI連携ではなく、審査官の思考プロセスや特許独自の言語空間にチューニングされているか。

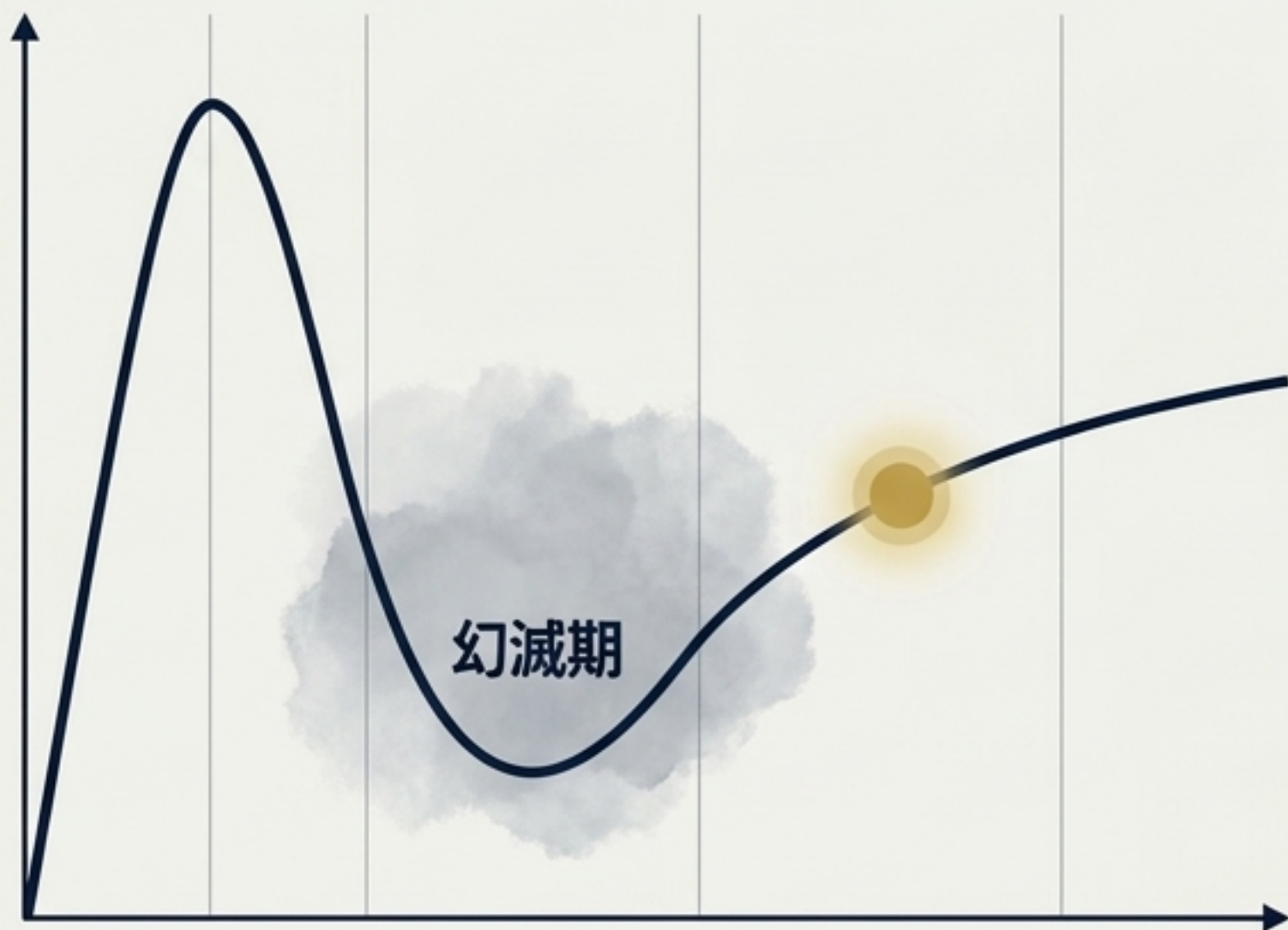
03



Accuracy Reporting（精度報告の透明性）

「〇〇%削減」といった表面的な広告ではなく、母集団、対象工程、過去問を用いた「再現率（Recall）」が開示されているか。

Future Outlook: 今後の展望と戦略的示唆



【幻滅期を越えて】

2025年に見られたAIへの過度な熱狂と「IP
ランドスケープへの静寂」を越え、技術は
真に業務へ根付く「実装期」へ本格突入。

【専門家に求められるパラダイムシフト】

ツール評価の軸は「どれだけ速いか」から
「いかに確実か」へ移行した。

知財部員・弁理士に求められるコアスキルは、
AIを『操作 (Operate) 』することではない。

AIが抽出・提示した根拠を、法的・技術的
観点から『検証 (Verify) 』する力こそが最
大の競争力となる。

「変わるスキル、変わらないスキル」の見極
めが、これからの知財組織の急務である。

Appendix / 調査メソッドと留意事項

【依拠データ】

本資料は「Claude Fable5.1」が2026年9月20日時点の公開情報に基づき作成した比較レポートをベースに再構築しています。

【事実と分析の分離】

レポート内の事実（公式サイトやプレスリリースで確認できた事項）と分析（推論）を統合し、インサイトとして視覚化しています。

【データセットの制約】

2026年の公式出展者一覧（全体）が未公開状態での調査に基づくため、出展企業の網羅性や新規・撤退の完全な検証には限界が含まれます。訴訟情報等についても、該当時点での一方当事者の発表（PR TIMES等）に依拠している点にご留意ください。